

英 文 学 に

デ コ ピ ン



阿部公彦

10 エミリー・ブロンテ『嵐が丘』の粘着性

英文学賛否両論シリーズ第一弾。今回はエミリー・ブロンテの『嵐が丘』をとりあげる。

熱狂的なファンの多いこの作品、私の周囲からも「もう何十回読み返したかわからない!」「これこそ、ザ・英文学。これで私は開眼した」との熱い思いが聞かれる。

しかし、そんな“熱狂派”のわきに“懐疑派”もいる。英国ヴィクトリア朝小説を専門にする人でも『嵐が丘』は苦手とか「まだ『フランケンシュタイン』の方がまし」と言う人がいる。どうしてだろう。この温度差は何なのか。『嵐が丘』読者における温度差の研究」といった論文があってもいいかもしれない（まるで物理の論文のようだが）。

たしかに『嵐が丘』は奇妙な小説だ。とにかく悪意と情念と暴力がたっぷり、それだけで読んでいてへこたれそうになる。加えて、プロットというにはあまりにひねりのない直線的な物語進行。登場人物の名前には使い回しが多く、キャサリンやリントンが何人もいて誰のことかわからなくなる。主役ヒースクリフの超人的な悪役ぶりもご都合主義的だ。

とにかく「あ〜、すっきりした!」とさわやかに感動できる小説ではないのだ。しかし、逆に言うと、小説の持つ「さわ

やかでない部分」をこれほど溜めこんだ作品も珍しい。

何と言ってもヒースクリフの粘着的な怨念。その復讐劇は親子二世代にわたる（何を恨んでいるのか忘れそうだ）。驚嘆すべき「しつこさ」だろう。ヨークシャームアなどという、たまに訪れる観光地としてはよくても、住むにはあまりに荒涼とした土地の屋敷に幽閉される人々の、息のつままるような生活も、部屋に鍵をかけたのかけないのといったちまちました細部も、慢性病のように重苦しい。

しかし、粘着性や閉塞感、小説の強度を高めるには最大の武器となる。私たちの作品体験を真の意味で充実させるのは、さわやかな忘却を許すようなスカッとしたプロットではなく、読んでも読んでも終わらないような、いやらしくねちっこくこちらの心に引っかかる澁みのようなものではないか。

『嵐が丘』は、好きだから読み返すという作品ではないのだ。読み返してもいないのに読み返したような気になる、そんなしつこい読後感をこの小説は生み出すのである。小説を好きになるための重要な方法がここにはある。忘れないこと。しつこく思い出すこと。一度読んだだけで、そんな感覚の入り口に立たせる力が『嵐が丘』にはある。 (英文学者)